悪魔の断罪－The Devil's Conviction－Part?

立花祐子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
悪魔の断罪－Ｔｈｅ　Ｄｅｖｉｌ'ｓ　Ｃｏｎｖｉｃｔｉｏｎ－Ｐａｒｔ２

【Ｎコード】
Ｎ９９９０Ｓ

【作者名】
立花祐子

【あらすじ】
悪魔の断罪－Ｔｈｅ　Ｄｅｖｉｌ'ｓ　Ｃｏｎｖｉｃｔｉｏｎ－に続き、懲りずに、悪魔「ザリアベル」と天使「アルシェ」の世直し話です。最終話のみ、悪魔との戦いのお話になっております。番外編の「イリュージョンショー」もお楽しみください。
※他サイトにも投稿しています。

ストーカー

「君は僕と結婚する運命なんだ。」

そのメールの文章を見て、牧子はため息をついた。
酔った勢いで、気楽にメールアドレスを教えたのが間違いだった…。

そのメールの主は「克男」と言い、バーで知り合った。
牧子がバーで独りで飲んでいると勝手に隣に座られ、話しかけられた。
正直、好みではなかったため、牧子は適当に話を合わせていた。
そして帰ろうとした時、克男にメールアドレスを教えてくれと言われた。

「ここの飲み代払ってくれる？」

牧子がそう言うと、克男が「もちろん！」と答えたので、飲み代と引き換えにメールアドレスを教えた。
…それが間違いだったのだ。

その夜から、メールが届き始めた。
最初は、何かおもしろくて読んでいた。
だが、翌日からエスカレートしてきた。

「どうして返事をくれないんですか？」
「私と一緒にいれば楽しい時間を約束します。」
「四六時中、あなたの顔がちらついて仕事になりません。」
「あなたは私と出会う運命だったんです。」
「結婚しましょう！きっとあなたを幸せにします。」

「あなたのためなら、命も惜しくありません。」

さすがに怖くなってきた牧子は、メールを拒否した。だが向こうが気づいたのか違うメールアドレスで届いた。
…自分のメールアドレスを変えようと思ったが、それをすると親や友人たちにまた連絡しなければならない。
また…というのは、タイミング悪く変えたばかりだったからだ。
牧子は、その克男のメールを迷惑メールフォルダに振り分け読まないようにした。

…だが、それだけでは終わらなかった。
会社の帰りに、何か視線を感じるようになった。
辺りを見渡すが、わからない。…正直、顔もよく覚えていなかった。
自分をじっと見ている男を探すが、どうしても見つからない。

そのうち朝でも、電車の中で視線を感じるようになった。…だが、やはりどこにいるのかわからない。
警察に行こうにも、相手の顔も覚えていないようでは話にならない。

……

そしてとうとう、克男は姿を牧子の前に現した。…克男は牧子のマンションの前で立っていた。
最初はわからなかった。だが、克男は「やっぱり来てしまいました」と牧子に話しかけた。
牧子はぞっとした。
メールが来るようになってから、1カ月が経ったころだった。いつの間にか、克男は牧子の家を調べていたのだ。
だが、牧子は冷静を装い、克男に言った。

「…ごめんなさい。…私、あなたに興味ないの。」
「そんな！…それならそうと返事をくれたらいいじゃないですか！」
「…ごめんなさい。」
「僕のどこが気に入らないんですかっ！？言ってくれれば、僕、直します！」

牧子は困り果てた。通り過ぎる人がくすくすと笑いながら通り過ぎていく。

牧子は、人目のつかないマンションの非常階段のところで克男と話すことにした。
だが、話しているうちに、克男がヒートアップしてきた。

「教えてください！本当に僕、あなたの好みに変わりますから！…背は高くならないけど…、この顔が嫌ながら整形します！痩せろというのなら痩せます！」

牧子は迫るように近づいてくる克男から逃げようとして、階段を上がらざるを得なかった。
克男も階段を上がってくる。そして、牧子も階段を上がる。
牧子は克男に体を向けたまま、階段をゆっくり上がりながら言った。

「顔とかそういうのじゃないの！」
「じゃぁ、僕は牧子さんの好みに合ってるんですね！！」
「…そういう意味じゃ…」

そう言い合いながら階段を上がるうちに、5階まで上がってしまった。それは自分の部屋の階だった。
牧子は自分の部屋を知られるのが嫌なので、また上に上がった。
そしてとうとう7階まで上がった。…そこで行き止まりである。

牧子は追い詰められてしまった。非常階段の柵は自分の背の半分ほどしかない。

「僕と結婚して下さい！同棲から始めましょう！それなら僕の事をわかってもらえると思います！」

「もう、はっきり言うわね。…私、しつこい人が嫌いなの！」

「こうさせているのはあなたです！あなたが僕を認めてくれたら…」

「もういい加減にしてっ！！」

牧子はとうとう大声を上げた。マンションに反響しているのを感じながら、牧子は必死に迫ってくる克男を近づけないように、両手を前に伸ばしたまま言った。

「絶対に無理なの！本当に嫌いなのよ！」

「だから、僕と一緒に暮らせばわかります！」

「…あなたと一緒に暮らすくらいなら、死んだ方がましよ！！」

「ひどいじゃないですか！僕の事をわかっていないくせにっ！」

克男がとうとう牧子に抱きつくように両手を広げて迫った。牧子が体を思わず反らした途端、そのまま柵を越えて落ちた。

牧子の悲鳴が遠のいていく。

「！！牧子さん！」

克男が柵から下を覗いた時はもう、牧子の体は下に群生している木の葉の群れに吸い込まれていた。

克男は慌てて階段を下りた。だが7階なので、なかなか1階までつかない。

克男は息を切らして、牧子が落ちた辺りに駆け寄った。

「牧子さんっ！大丈夫ですかっ！？」

牧子は、地面に横たわっていた。
傍には大きな白い羽を背に持った、銀髪の男がかがんでいた。

「！？」

克男が思わず目をこすると、男は消えていた。
克男は、はっとして牧子に駆け寄った。

「牧子さんっ！牧子さんっ！しっかり！」

克男は牧子の肩に手を乗せ揺らした。
牧子が目を覚ましたが、克男の顔を見て悲鳴を上げた。
克男は驚いて、思わずその場を走り去った。

……

「どうしてだ…どうしてだよ…？」

克男がそう言いながらふらふらと歩いていると、いつの間にか路地に入りこんでいた。ラブホテルや廃ビルが並んでいる。

「あれ？どこだ？ここ…」

克男は目を拭い、辺りを見渡した。

「…とにかく大通りに出よう…。出たら…また牧子さんにメールしよう…」

克男はきょろきょろしながら歩き始めた。

「…振られたようだな。」

そんな声が背中から聞こえた。
ぎくりとして振り返ると、紅い目の男が立っていた。両頬に長短2本ずつ傷がある。

「！！…悪魔っ！？」
「そう…「ザリアベル」だよろしく。」

ザリアベルが口の端をいがめるようにして言った。克男はおびえながら言った。

「な、なんで悪魔が僕に…」
「お前の今までの行動を見ていた。…悪魔は仲間の臭いに引かれる習性があってね…。」
「お、俺は悪魔の仲間になるような人間じゃないっ！！」
「謙遜するな。お前には素質がある。」

ザリアベルは、そう言って克男の肩を叩いた。
叩かれた克男は、ぞっとして叩かれた肩を見た。…何か気持ち悪かった。

「あの牧子って女にに迫るやり方など、悪魔そのものだったよ。私も参考にさせてもらおうと思ったほどだ。」
「！！」
「お前を気に入った。…どうだ、一緒に地獄へ行かないか？仲間を紹介したい。」

「い、嫌だっ！！」

克男は思わず傍にあった廃ビルに入り、階段に足をかけた。ザリアベルはゆっくりと克男に近づきながら言った。

「なぜ逃げる？俺が気に入ったんだぞ。」

克男は上へと上がった。そしてとうとう背を向けて駆け上がった。…ザリアベルは、カツーン、カツーン、という不気味な足音を響かせて階段をゆっくり上がりながら言った。

克男はぜいぜいと息を切らしながら、階段を上がった。上がっても逃げ切れない事はわかっていたが、下から終われているため、上がるしかなかった。

克男はとうとう最上階についた。「非常口」とある鉄製の扉を押し開け、屋上に飛び出した。

強い風にさらされながら、克男は息を切らしながら、振り返った。ザリアベルは息も切らさずゆっくりと克男に近づいてきている。

「俺と一緒に地獄へ行こう。」

ザリアベルは上に向けた手のひらを、克男に差し出しながら言った。

「嫌だ…」

「どうして？俺が一緒なんだぞ？…俺と一緒にいたら楽しく過ごせる…。」

この悪魔のような男は、自分が牧子に言った言葉とほとんど同じ意味の事を言っていることに気付いた。

全く気のない相手に言われてもうれしくないどころか、恐怖しか感じられない…。

克男は、自分が牧子にしてきた事が、いかに自分勝手だったかをやっと悟った。

「わかった…もうあいつにはつきまとわないから…だから、見逃してくれ！」

「そんなことは関係ない。…俺がお前を気に入ったと言ってるんだ。」

「！！」

克男はいつの間にか柵に背を乗せていた。もう逃げ切れない。

悪魔は手を伸ばしたまま、克男に近づいてきている。

「さぁ、俺と行こう。…地獄へ。…さぁ…」

「嫌だっ！！お前と一緒に地獄へ行くくらいなら…独りで死んだ方がましだ！」

…そう言ってから、はっとした。非常階段から落ちる直前、彼女も同じような言葉を言っていたことを思い出した。

悪魔は不気味な笑みを見せながら近づいてくる。

克男は強く柵に背を押さえ付けるようにした。

…その時、突然背中が軽くなったのを感じた。

「！！！」

克男は悲鳴を上げて、ビルから落ちた。

……

（僕は死ぬんだ…）

落ちていく中、克男はそう思う余裕があった。

（死ぬ前に彼女に謝りたかったけど、もう無理か。そもそも僕の言葉なんて、もう聞いてくれないよな…）

そう思ったとたん克男は逆さになったまま、体が止まったのを感じた。

いや体が止まったというより、時間が止まったような感じだった。

自分が落ちていく時に聞こえていた風の音がなくなり、周囲も動きが止まっている。

「？？？？」

「…はい、ここまでね。」

いつの間にか、背中に白い羽のある男が、同じように逆さになって目の前にいた。

克男は目を見開いた。

「！？…お前はさっき…牧子さんの傍にいた…」

「そう。一応天使やってるアルシェだ。よろしく！」

さっきの悪魔とは違う優しい声だった。克男は思わず「よろしく」と答えていた。

天使があきれたように腕を組んで言った。

「さっきのレディーは危なかったよ。…やりすぎだったんじゃない？あの悪魔に魅入られて、ちょっとは反省した？」

「…した…」

「もう彼女にはあんなことしない？」

「…しない…」

「天使の俺に誓える？」

克男は一瞬迷った表情をした。すると天使が口に手をかざして叫んだ。

「悪魔さーん！出番…」

「わかった！誓うっ！誓うよっ！」

克男が慌てて言った。天使はにっこりと微笑んだ。

「よろしい。じゃぁ、ついでに助けてあげる。」

天使はそう言い、そのまま消えた。

「えっ！？おいっ！」

また風の音が戻り、体が落ちていく。

次の瞬間には、体に衝撃を感じた。

……

「…おいっ！大丈夫かっ！？」

そんな声に、克男は目を覚ました。

「あっ！目を覚ました！大丈夫か！？」

克男は目の前の光景に驚いた。たくさんの人が自分を見上げている。

自分の体をよく見ると、大きな木の枝に洗濯物のようにひっかかっていた。

「わっ！」

そう言って体を起こそうとした時「動くな！」「動いちゃだめだっ！」と人々が口々に叫んだ。

「動くと落ちるぞ！今レスキューの人、呼んだからっ！そのままでいろよ！」

1人の男がそう言った。その男の顔を見て、何故かさっきの天使の顔を思い出した。

「浅野さんっ！来ました！」

そんな若い男の声がした。レスキューを呼んでくれたという男が駆けだして行き、レスキュー車に両手を振っている。

…克男は、ほどなく木から降ろされた。レスキュー車の梯子を下りていく時、拍手が聞こえた。

「ビルから落ちて、木に引っ掛かるなんて…君は強運の持ち主だね。」

無事に地面に降りてからレスキュー隊員にそう言われ、克男は申し訳なさそうに頭を下げて言った。

「…天使と悪魔のおかげです。」

「え？」

「…あ、いえ…」

克男は咳払いをして言った。

「生まれ変わったつもりで…人生やり直します。」

レスキュー隊員が笑った。

……

『最後のメールです。』

3日後ー　克男から牧子にメールが届いた。牧子はためらったが、その件名にメールを開いてみた。

『これまで本当に申し訳ありませんでした。あれからいろいろ考える事があり、本当に反省いたしました。心からお詫びいたします。それで、タイミング良くというか…大阪に転勤が決まりました。明日出発します。もうあなたには物理的に会うこともありませんから、どうぞ安心して下さい。
これからは今までのことを悔い改め、また新天地で人生をやり直そうと思います。このメールを読まれましたら、メールアドレス共々削除をお願いいたします。どうぞお元気で。さようなら。』

牧子は何故か涙が溢れ出てきたのを感じた。
慌てて目を拭うと、返信ボタンを押し、

『新天地で、あなたに幸せが訪れますように。』

と打ち、送信した。

その後…返事が返って来ることはなかった。

……

「あー…どうするかなぁ…」

天使「アルシェ」の人間形であり「イリュージョニスト」の浅野俊介は、自分の所属するタレント事務所「相澤プロダクション」の会議室で両目をこすりながら言った。

前には、同じプロダクションのアイドルであり「清廉な歌声を持つ魂」と悪魔たちに恐れられている、北条(きたじょう)圭一が苦笑しながら向かいに座っている。

「久しぶりの日本公演ですから、派手に行きましょうって話でしたよね。」

「ん…そうなんだが…。派手にって何をどう派手にすりゃいいんだか…」

「…そうですよね…。」

圭一が真っ白な紙を前にして、ため息をついた。浅野が腕を組み、天井を見上げながら言った。

「オーソドックスな、火と水のイリュージョンはいつも通りやるとして…。何か目新しい物ってないかなぁ…」

「ねぇ、浅野さん…。ザリアベルさんを誘いませんか?」

「ザリアベルを?」

「ええ。天使と悪魔のショーをするんですよ。」

「天使と悪魔のショー!?」

「浅野さんもアルシェの姿で出るんです。…その姿で、客席の上を飛び回るんですよ。」

「うーーん…悪くないかも…。で、ザリアベルは?」

「ザリアベルさんも飛べるんでしょ？」
「ん、まぁ。」
「お２人で追っかけあいっこってのはどうです？」
「あのねー…圭一君…子どもの遊びじゃないんだから…」
圭一がくすくすと笑った。どこまで本気で言っているのかわからない。
「圭一君！ふざけないで、真面目に考えましょうっ！！」
浅野が怒った風を見せて言った。圭一は笑いながら言った。
「ふざけてないですよ。天使と悪魔のショーってのはなかなかいいと思いませんか？」
「うーん…。確かに…。だけど、ザリアベルが承知するかどうか…。」
「そこですよねぇ…」
圭一が机に顎を乗せて、ふっと紙を吹いた。紙は浅野の前にひらりと落ちた。
浅野が「こら！」と言って、紙を吹き返す。
圭一が笑いながら、またその紙を浅野に吹き返した。
「…おもしろいなこれ…」
浅野がそう言うと、その紙を吹いた。
紙が床に落ちた。
「ぶー…浅野さんの負けー！」

圭一がそう笑いながら言い、紙を拾った。

「なんでっ！？なんでよ！そんなルール聞いてないもん！」

「じゃぁもう1回勝負します？」

「よーし！」

浅野が両そでをめくり上げ、圭一が紙を吹くのを待っている。

2人はそのまま、紙吹き遊びで時間を潰した。

…いつもこんな感じで、イリュージョンショーの演目が決まらないのである。

日本公演は本当にできるのか…不安は募るばかりである。

（終）

一家心中

「私が殺しました…」

綾子は、警察署の取調室で、魂が抜け落ちたようにうつむいたまま言った。

前で調書を取っている捜査一課課長の能田は、神妙な表情で綾子を見ている。

「本当に君が家族を皆殺したのかい？」

「はい。皆…」

綾子はそう言うと、涙をこぼした。

「…君の弟さんも？」

「弟も…」

綾子はそう言うと、泣きながら震えだした。

能田は、信じられないようにため息をついた。

……

「一家心中が一転。娘が殺したと供述を始める…か…」

圭一がテレビのニュースを見ながら、隣のソファーに座っている「浅野俊介」に、「はい、あーん」と言った。

浅野は新聞に目を落としたまま、口を開けた。

圭一はその浅野の口の中に、剥いたミカンを入れた。

「んっ…めちゃ甘っ！」

食べながら浅野が言った。

「でしょ？熟れ熟れですからね。」

圭一がそう言って、自分もみかんを口に入れた。

「…この子は殺ってないよ。」

浅野がいきなり言った。

「！？…え？…さっきの一家心中のことですか？」

浅野は新聞を開いたまま、前のテーブルに置いて言った。

「…この子は殺していない。本当に一家心中だったんだが、この子だけが何故か助かったんだ。…それで罪の意識から、自分が殺したと言ってる。」

「罪の意識って…この子は何も…」

「ん。はたから見てたらそうだけどね…。でも、この子は自分だけ生き残ってしまった事に罪の意識を感じてしまっているんだ。」

「これ、確か能田さんの管轄ですよ。…なんとか、この子が殺していないという証明ができないでしょうか…？もし、このまま実刑なんてなったら、可哀想ですよ。」

「ん～…しかしなぁ…。一家心中だから難しいよなぁ…」

浅野がそう言って、同じ一家心中のことを書いてある新聞の記事を凝視している。圭一も、その記事を見つめたまま、黙り込んだ。

……

留置所に戻された綾子は、膝を立てて座り、その膝に顔を伏せて泣いていた。
まだ、父親が襲いかかってきたことを、鮮明に記憶が残っている。

朝、突然だった。

母親の悲鳴がしたので、その声に飛び起きた綾子は、自室から飛び出し、階段を駆け降りた。

「お母さん！どうしたのっ！？」

見ると、恐ろしい光景が綾子の目に飛び込んできた。
母親の胸に包丁が刺さっていた。
そして母親の横で寝ていた、まだ産まれて９カ月にしかなっていない弟の首に痣のような痕が見えた。

「！！たっちゃん！」

思わず弟の身体を揺すったが、弟は口を開けたまま動かなかった。
綾子はいきなり背中に殺気を感じ、思わず振り返った。
鬼のような形相をした父親が、包丁を振りあげていた。

「お父さんっ！？」

綾子はその振り下ろされる包丁を、必死に受け止めた。

「死んでくれ…一緒に死んでくれ…綾子っ！」

「どうしてっ！？…どうしてこんなこと…！」
「もう…だめなんだ…家も何も取り上げられてしまう…。もう死ぬしかないんだっ！！」
父親のすごい力に、ソフトボール部で鍛えている綾子はなんとか耐えていた。
「やだぁっ！！」
綾子はそう叫ぶと、父親の包丁を咄嗟に奪い取り、傍に投げ捨てた。
父親がその包丁に飛びついた。
「お父さんっ！やめて…！」
その父親の背中にすがった途端、父親は綾子を振り払い、自分の胸に包丁を突き立てた。
「！！！…お父さんっ！！！！」
綾子はその場に座り込んで、痙攣しながら絶命していく父親の姿を最後まで茫然と見ていた。
「お父さん…どうして…」
綾子は、部屋を見渡した。
そして口を開けたまま死んでいるまだ幼い弟に四つん這いになって近づいた。
「たっちゃん…嫌だ…たっちゃんっ！！」

可愛がっていた弟の身体を抱いて、綾子は泣いた。

……

留置所のベッドに寝転んだまま、綾子は天井をぼんやりと見つめていた。

明日には少年院へ移送されるという。

「たっちゃん…たっちゃんだけは、生きて欲しかったのに…。私が何で生きてるの？」

綾子はそう呟いて、涙をこぼした。

突然、留置所が明るくなった。綾子はベッドの横の光の塊を見た。

「！！」

綾子は驚いて体を上げた。

光の塊は、人の姿になり、やがてその人の姿がはっきりしてきた。

背中に羽を持った銀髪の男だった。

切れ長の目元に、引き締まった薄い唇。

「天使？」

綾子は思わず呟いた。

「ご明察。…名はアルシェだ。よろしく。」

男が微笑みながら言い、綾子に手を差し出した。

綾子はじっとその手を見ていたが、やがてその手に自分の手を乗せた。
大きくて暖かい手だった。
「ちょっと一緒に来てくれるかな？」
天使がその綾子の手を握って言った。
綾子が驚いてその天使を見ると、天使が微笑み光り輝いた。その光に綾子も包まれた。
……
綾子が目を開くと、見渡す限り花畑が広がっていた。
「！！…ここ…もしかして…天国？」
隣に立っている天使「アルシェ」が微笑みながら、綾子に言った。
「正しくは「辺獄（りんぼ）」という「冥界（めいかい）」だがね。罪のない幼い魂がとどまる場所だ。」
「どうして私がここにいるの？」
「ちょっと着地に失敗したな…。…あそこ見て。」
綾子は天使が指さす先を見た。
小さな赤子がお座りをして、手を叩いて喜んでいる。
傍には、小学生くらいの男の子が、赤子と一緒に手を叩いていた。
「そうそう！上手上手！ぱちぱちぱち！」

男の子の声が聞こえる。

「…あの赤ちゃん…たっちゃんっ！？」

「そうだよ。一緒に遊んであげているのは、海斗君と言ってね。親に虐待されて殺された子だ。」

「！！」

綾子はアルシェを見上げて言った。

「…私…近づいて大丈夫？」

「大丈夫だよ。…行ってあげるといい。」

綾子はうなずいて、赤子の元へ走りだした。

「たっちゃんっ！！たっちゃんっ！」

赤子が手を叩くのをやめて、綾子を見た。

男の子が驚いて綾子を見ている。

「あーあー！！」

赤子は嬉しそうに声を上げた。

「たっちゃんっ！！」

綾子は赤子を抱きあげ、泣きながら弟を抱きしめた。

傍にいた「海斗」が微笑みながら立ち上がり、綾子と赤子を見上げている。

「お姉ちゃんってこの人なんだ！たっちゃん、よかったね！」

海斗がそう言った。傍に移動していたアルシェが、そんな海斗の肩を叩いた。
綾子は辺りを見渡した。

「…お母さんは？ここに来てないの？」
「幼い魂だけしか辺獄（ここ）に入れないという事もあるが…実は…」

アルシェが表情を暗くして言った。

「弟さんを死なせたのは、母親なんだ。」
「！？…えっ！？」
「…父親だけで決めたんじゃない。…母親と相談して一家心中を決めた。一番に犠牲になったのが、弟さんだ。」
「…そんな…。ひどい…。」

綾子は綾子の頬に手を当て、キャッキャッと笑っている弟を見た。
そして、海斗を見降ろして言った。

「ずっと遊んでくれてたの？」
「うん！！いきなり僕の前に現れたんだ。最初はずっとお姉ちゃんを探して泣いてたけど、僕、がんばってあやしたんだ！」
「そう…ありがとう…」

綾子はまた新しい涙をこぼしながら、赤子を抱いたまましゃがんだ。

「…これからも、ずっとたっちゃんと遊んであげてくれる？…お姉ちゃん…ここには一緒にいられないんだ。」
「もちろんっ！！」

海斗が言った。天使アルシェが、海斗の頭を撫でた。

「たっちゃんが、生まれ変われるまで、僕も生まれ変わらないでいるよ！」

「…生まれ変わる？」

綾子が言った。

「うん！たっちゃんね！お姉ちゃんの子どもに生まれ変わりたいんだって！！ねったっちゃん！」

海斗が赤子にそう言うと、赤子は「あーあー」と言って、綾子の頬に手を這わせた。

「！！…私の…子に…？」

「だから、お姉ちゃん、絶対に子ども産まなくちゃだめだよ！たっちゃん、生まれ変われなくなっちゃう。」

「…うん…うん！…私…たっちゃんを大事にしてくれるいい人探して…たっちゃんを産むわ。」

そういう綾子に、アルシェが言った。

「…じゃぁ…自分が家族を殺したなんて、もう言わないね？」

綾子は、目を見張ってアルシェを見た。

「…殺してもいないのに殺したなんて言っちゃいけない。…元の世界に戻ったら、ちゃんと刑事さんに本当のことを言うんだ。」

綾子は下を向いた。

「でも…でも…一旦殺したって言っちゃったのを、やっぱり殺してませんなんて…信じてくれるかしら。」
「大丈夫。そこは任せてくれ。」
「！」
綾子はアルシェを見て、うなずいた。
……
綾子はアルシェに横抱きにされ、空を飛んだ。
弟を抱き上げた海斗が、手を振って見送っている。
「たっちゃん！元気でね！絶対にたっちゃん産むからね！海斗君よろしくね！」
綾子はそう言いながら、海斗と弟に手を振った。
「任せて、お姉ちゃん！ばいばいっ！」
海斗が弟の手を取って、手を振らせた。
弟が「あーあー」と叫んでいる。綾子はまた涙が溢れ、アルシェの首にしがみついて泣いた。
「…絶対に…絶対に産むからね。」
綾子は何度も言った。
……

綾子ははっと目を覚ました。
そして飛び起きた。

「…夢…？」

そう呟いて、ふと自分が寝ていたベッドを見た。
枕の横に、大きな白い羽が1本落ちていた。
綾子はその羽をそっと手に取り、見つめた。
天使「アルシェ」のことを思い出した。

……

「ここ引っ張って…」

冥界から留置所に戻った綾子に、アルシェが羽を自分に向けて言った。

「1本抜いて。」
「え？大丈夫？」
「大丈夫、大丈夫。」

綾子はアルシェに言われるまま、羽を1本だけ引っ張った。

「いててててて！」

アルシェが言った。綾子は慌てて手を引っ込めた。

「大丈夫！大丈夫だから、早く抜いてっ！！」

アルシェが涙目になりながらそう言うので、綾子は「ごめんね」と言いながら、羽を1本抜き取った。
アルシェは抜き取られたところを手でさすりながら「これでよし」と言った。

「その羽を服の中に入れて、隠しといて。…で、明日、能田刑事さんに正直に言うんだよ。その羽の力できっと信じてもらえるから。」
「うん！…ありがとう…アルシェ。」
「どういたまして！」

その砕けた答えに、綾子は思わず吹き出した。

…翌日、綾子は能田に本当のことを言った。そしてアルシェの言葉どおり、無罪放免となった。

「…この羽…宝物にしよう…」

綾子は、家に帰ってから羽を胸元から取り出し、アルシェのことを思い出しながら呟いた。

……

「地獄へようこそ」
大悪魔（アークデビル）「ザリアベル」が、綾子の両親に言った。目は燃えるように紅く、両頬には長短2本ずつ傷がある。
両親は、お互いの手を握り合いながら震えている。父親が言った。

「どうしてこんなところに…」
「子殺しの罪だ。まさか天国に行けるとは思うまい？」

「こ、殺したのは、こいつだ！俺は」
「指示したのは、お前だろう！」
ザリアベルが父親に怒鳴り付けた。
「手にかけなくても同罪だ。…抵抗できない赤ん坊を殺すなんて、お前達は悪魔以下だ！」
両親は震えて何も言えなかった。
「だからお前達には…抵抗できない状態で責め苦を受けてもらう。」
ザリアベルが指をならした。
両親の後ろに柱が地下から出現し、その柱から太い蔓(つる)が伸びた。そして、逃げようとした両親の身体に絡り、両親はそれぞれ柱にくくりつけられた。
両親は悲鳴を上げて、もがいている。
「先ずは火責めから。」
ザリアベルが指を鳴らすと、炎が2本の柱を取り囲んだ。
「やめてくれ！助けてくれ！」
父親の声もむなしく火は柱を覆った。両親の悲鳴が上がった。
「…まだまだはじまったばかりだぞ。後に水責め、針責め…ゴマンと責め苦はある。…死ぬまでな…。…あ、そうか…お前達はこれ以上死ねないんだったな。」

ザリアベルはそう言って笑いながら、姿を消した。

…後には、両親の悲鳴が響いていた。

……

「大天使様（アークエンジェル）がびっくりしてたよ。大悪魔（アークデビル）のザリアベルが赤ちゃん抱いて、いきなり目の前に現れたもんだから…。」

天使「アルシェ」の人間形「浅野俊介」が、自分の前で、圭一の作った麻婆豆腐を美味しそうに食べているザリアベルを見ながら言った。圭一もアルシェの横でザリアベルを見ながら言った。

「母親が、赤ちゃんを一緒に地獄へ連れていこうとしたんだそうですね。」

浅野がうなずいて言った。

「あの母親は、子どもは自分と一緒にいた方が幸せだと思い込んでたんだ。それは単なる母親のエゴなんだが…」

「だから自分の子を殺すなんてことできたんだ…。」

圭一が悲しそうに言った。

「ザリアベルがあんなに怒ったのは、海斗君の時以来じゃないか？」

浅野がそう言ったが、ザリアベルはなんの反応も見せず、圭一に「おかわり」と空の皿を差し出した。

「はい！」

圭一は嬉しそうに皿を受け取り、立ち上がった。

「ザリアベル、辛いのもＯＫなんだ。圭一君のは結構辛めなのに…。」

辛いのが苦手なアルシェが感心したように言った。

「美味い。」

ザリアベルはそう言いながら、バケットをかじった。

「麻婆豆腐とバケットが合うなんて、思いつかなかったなぁ…」

アルシェが更に感心している。

「はい、ザリアベルさん」

圭一がザリアベルの前に皿を置いて言った。

「ありがとう。」

ザリアベルはそう言うと、また食べ始めた。

「あ、そうだ。ザリアベル。」

浅野がザリアベルに言った。

「今度、イリュージョンショーをするんですが、一緒に出演してもらえませんか？」

「！？」

ザリアベルの動きが固まった。浅野が続けた。

「日本公演だけでいいので。」

「…どうして俺が…」

「うちと提携して欲しいんですよ。それで「ノイツ・クロイツ」という名前で日本国籍を取って欲しいんです。」

「！…だから、どうして俺がそんなことまで…！」

「その悪魔のままでは、いろいろと不便が出るからですよ。車も運転できないし、外を歩いたら、職務質問受けるし。」

「…国籍があっても、職質は受けるだろう。」

「…ねぇ…ザリアベルさん…」

圭一が体をザリアベルの方に乗り出して言った。

「…ザリアベルさん…人間形になれないんですか？クロイツさんだった頃のお姿とかに…」

ザリアベルはスプーンを持ち上げたまま、圭一を見つめた。だが、その目は青い。怒っているわけではないようである。

「俺はアルシェと違って、姿を変える事はできないんだ。」

「！！」

圭一が目を見張った。浅野も驚いて言った。

「…それは、大悪魔（アークデビル）のザリアベルでも…ですか？」

「俺だから許されないんだ。背負った罪が重すぎてね。変わりたくても変われないんだ。」

「ごめんなさい。」

圭一がうつむいて言った。浅野はその圭一の隣で、神妙な表情をしてザリアベルを見ている。

ザリアベルは、皿の中の麻婆豆腐をすべて食べ終わると、そばにあった布巾で口を拭いた。

「ごちそうさま。」

そう言って、立ち上がった。

「！…ザリアベルさん…」

圭一も立ち上がり、玄関に向かうザリアベルを追った。浅野も圭一と一緒に玄関に向かう。

ザリアベルは、ドアに手を掛け玄関を出ようとしたが、ふと動きを止めて言った。

「イリュージョンショーの方は考えておく。」

ザリアベルはそう言うと、玄関を出て行った。

圭一と浅野は目を見張り、笑顔を見合わせた。

（終）

誘拐

正樹は、学校から家に向かう道を必死に走っていた。
今日は海斗(かいと)が赤ちゃんを連れて、遊びに来る日なのである。
海斗は元同級生で、１年生の時に父親に虐待されて死んだのだった。
だが、正樹が海斗を追って死のうとした時に助けてくれた悪魔と天使の力で、海斗は冥界から正樹の部屋に遊びに来られるようになった。
赤ちゃんというのは、最近一家心中で殺された赤ちゃんの世話を海斗がしているのだそうだ。

（赤ちゃん、早く見たいな…。）

正樹はそう思いながら、路地を曲がった。その時、背中が引っ張られるような感覚を覚えた。

「！？」

次の瞬間、正樹はランドセルを剥がしとられていた。

「！？返して！」

正樹はランドセルを持って逃げる男を追いかけた。

「ランドセル返して！」

男が、白い大きな車のスライドドアを開き入ってしまった。
正樹は開いたままのドアに飛び込んだ。

「ランドセル返せ！」
正樹がそう言ったとたん、スライドドアが正樹の背中で閉じた。
正樹が「しまった」と思ったときには、車は走り出していた。
……
「はい！元気な男の子です。内臓も大丈夫だと思いますよ。すぐに連れて行きます。はい！はい！」
運転している男がそう言い、携帯電話を切った。
後部座席にいる正樹は、隣に座っている男にさるぐつわをされ、後ろ手に縛られていた。
正樹を縛った男は、運転している男に言った。
「兄貴、どこまで行くんすか？」
「横浜だ。そこでこいつを引き渡して金をもらうんだ。一億入るぞ。」
「一億！」
「ああ…今子どもの臓器売買が熱いんだよ。生きたまま連れていかなきゃならないってのが、厄介だがな。」
「…この子の臓器を売るんすか。」
「そうだ。腎臓、肝臓、心臓、膵臓…皆、高い金額で売れるんだそうだよ。」
それを聞いた男は、何かぞっとした表情をして正樹を見ながら言った。
「…全部…取っちまうんですか？」
「当たり前だろう。」

「そんな…この子死んじゃうじゃないですか！」
「ああ、死ぬよ。何、今さらバカなことを言ってるんだ？」
「！！…」

隣に座った男が何も言わなくなった。
それを聞いていた正樹は（僕…死ぬんだ。）と思った。だが悲しくも怖くもなかった。

（死んでも独りじゃない。僕には海斗君がいるもん。…それに、誰かの体の一部になれるんだし…。）

正樹はそう思うと、ふと隣の男にもたれて目を閉じた。

「！？」

もたれられた男は驚いて、正樹を見た。
正樹は穏やかな顔をして目を閉じていた。男は、とっさに手を正樹の肩に回した。すると正樹は、こてんと男の膝に倒れてしまった。

「！！」

正樹は男の膝の上で寝息を立て始めた。

…

車は横浜の港についた。
もう暗くなっている。

「…おい、ついたぞ。起きろよ。」

正樹はそう体を揺らされ、目を開いた。目をこすろうとしたが、手を縛られていることに気付いた。
男は、正樹の体をゆっくりと起こさせた。

「歩けるか？」

正樹はうなずくと、開いたスライドドアから両足を下ろして、車から降りた。
寝起きでふらふらしている正樹を、隣にいた男が正樹の腕を掴んでくれていた。
運転席から降りた男が、携帯電話を耳に当てた。

「あれ？何で出ないんだ？」

そう言いながら、また電話を掛け直し、携帯電話を耳に当てた。…
しばらくして男の表情が変わった。

「！？…警察っ！？」

男は慌てて電話を切った。

「兄貴！？警察って…」

正樹の腕を持っている男が言った。
運転していた男が、携帯電話を見つめたまま言った。

「…臓器売買の会社が摘発されたんだ…。…電話番号知られちまった…逃げなきゃ…」
「！！」

正樹の腕を持った男は慌てるように、正樹のさるぐつわと後ろ手に縛っていた紐を外し始めた。運転していた男が驚いて言った。

「こらっ！お前何をしているっ！？」

「だって、この子はもういらないんでしょう！？この子を逃がして、俺たちも逃げなきゃ！」

「ばかやろうっ！こいつはもう俺たちの顔を見てるんだぞ！こいつを殺してから逃げるんだっ！」

「！？…そ、そんな！…まだ子どもじゃないですか！無意味に殺すことないっしょ！」

「何を今さら善人ぶってるんだ！そのままそいつを押さえてろっ！」

運転していた男はそう言いながら車の運転席に戻ると、どこに隠していたのか短銃を取り出した。そして正樹にその短銃を向けた。

正樹の腕を持っていた男が驚いて、正樹の体を自分の後ろに回した。

正樹は目を見開いて、自分をかばう男を見上げた。

「兄貴っ！いつの間にそんなもの…」

「そいつを前に出せ！」

「あ、兄貴っ兄貴、こうしましょう！海に放り込むんですよ！それでいいじゃないですか！…わざわざ足がつくような…そんなもので殺さなくても…」

「だめだっ！海に放り込んだって死ぬとは限らん！」

正樹は2人が言い合うのを聞きながら、自分が今どうするべきかわからなかった。正樹を後ろに隠していた男は両手を広げると、首だけを正樹に向けて言った。

「逃げろっ！俺が兄貴を何とかするからっ！」

「おじさんも一緒に逃げてっ！」

「いいから、先に逃げろっ！」
「いやだっ！」
正樹が男の服を掴んで言った。銃を向けている男がいらいらしたように言った。
「何やってるんだっ！そこをどけっ！どかないとお前を先に撃つぞ！」
「い、いいですよ…撃てるものなら、撃って下さいよ！」
「おじさんっ！！」
正樹は男の服を掴んで揺すった。その時「いい度胸だな！」と言う声と共に、撃鉄が起こされた音がした。
「おじさん！！」
正樹がそう叫んだ途端、発砲音がした。男は弾かれるようにして背中から倒れた。
正樹は「おじさん！」と叫びながら、倒れた男にしがみついた。
「おじさん、おじさん…しっかりして！」
「ばか…逃げろ…早く…」
「おじさん、起きて…一緒に…」
「いいから…早く…逃げろ…」
男は息を弾ませながらそう言った後、動かなくなった。
「おじさん？…いやだ…おじさん！おじさん！」
正樹は男の体を揺らしたが、男は動かなかった。

「さぁ…坊や…目をつむれ。一瞬でおわる」

銃を向けている男が、ゆっくりと正樹に近づきながら言った。撃鉄がまた「カチリ」という音と共に起こされた。

正樹は怒りに満ちた目で、銃を自分に向けながら近づいてくる男を睨みつけた。

男は、正樹が怖がらない事に逆に恐れを感じ、思わず引き金から指を離した。

「…赦さない…絶対に赦さない…！」

正樹はそう呟いてから、立ち上がって叫んだ。

「ザリアベル！！」

突然、銃を向けていた男の前に黒い人型の炎が立ち上った。そしてその黒い炎は、手を広げて立つ男の姿となった。男の目は燃えるように赤く、両頬には長短2本ずつ傷がある。

「！！」

銃を向けていた男が、咄嗟に引き金を引いた。弾丸はザリアベルの体の手前で弾かれた。

「！？…うわ…うわぁ！」

男は銃を落として、背を向けて逃げ出した。

ザリアベルが、逃げる男の背に片手を差し出し、首を掴む様な所作をした。

「！！…っ！」

逃げようとしていた男が自分の首を掴み立ち止まった。ザリアベルが手を上にゆっくりとあげると、男の体も一緒に宙に浮き始めた。

「やめろ…苦しい…！…離してくれ…！」

宙に浮いた男は、自分の首を両手で掴んだまま、足をばたつかせている。

ザリアベルはそのまま、正樹に顔だけを向けて言った。

「探したんだぞ、正樹。どうして意識を塞いだりしたんだ。」

「ごめんなさい…。自分でなんとかしようって思って…」

正樹がうつむきながら言った。死ぬつもりだったことは言えなかった。ザリアベルがため息をついて言った。

「こういう時に頼りにしてくれなきゃ、友達になった意味がないじゃないか。」

「…うん…。」

正樹は、はにかむように微笑んでから「ごめんなさい」と言った。

その時、撃たれた男が呻いた。

「！！おじさんっ！！しっかりして！」

正樹がそう言って男にかがみ込んだ時、ザリアベルが前に向いて言った。

「アルシェを呼べ。ひがむから。」
「！…わかった。」
正樹は笑いながら「アルシェ！」と叫んだ。
光の塊がザリアベルの背中に現れた。そしてその光の塊は、白い羽根を背に広げた銀髪の男に変わった。
「呼ばれて、飛び出てじゃじゃじゃ…」
「なんとか大魔王、その怪我人をなんとかしろ。」
ザリアベルが、アルシェに最後まで言わせないように言った。
「任せるある！」
アルシェはそう言いながら敬礼すると、呻いている男の体を起こして言った。
「正樹君、羽根につかまって！」
正樹は笑いながらうなずいて、アルシェの背中に回り羽根にしがみついた。
アルシェがザリアベルの背に言った。
「後はよろしく、アクビ姫！」
「誰が姫だ。」
「えっそこ！？」
そのアルシェの声を残して、３人は消えた。
ザリアベルは苦笑しながら、更に自分の手に力を込めた。

「うあああぁ…」

足をばたつかせていた男の力が無くなっていく。そのうちに、だらりと体中の力が抜けたように動かなくなった。

「だらしのない奴だ。」

ザリアベルはそう呟くと、ぱっと手を開いた。
男の体が、地面に音を立てて落ちた。
ザリアベルは地面に落ちた男にゆっくりと歩み寄り、傍に落ちている携帯電話を拾い上げた。
そしてある番号をプッシュすると、電話を耳に当てた。

「もしもし。ここに銃を持った男が倒れているから、捕まえに来い。…え？ここはどこだって？…そんなこと知るか。携帯切らないでおくから、そっちで調べろ。」

ザリアベルはそう言うと、そのまま倒れた男の傍に携帯電話を置いた。

『もしもしっ！もしもしっ！！』

警察官の慌てた声を背に、ザリアベルは姿を消した。

……

「臓器売買会社…摘発か…。」

ハクション大魔王…ではなく、銀髪の天使「アルシェ」の人間形「浅野俊介」は、自宅のソファーで新聞を広げてそう呟いた。

「正樹君、間に合って良かったですね…。もし摘発がもう少し遅れてたら、危なかったんじゃないですか？」
天使「アルシェ」の主人（マスター）「北条圭一（きたじょう）」が、浅野の前にコーヒーの入ったカップを置きながら言った。浅野は新聞を畳みながら言った。
「ああ。正樹君自身も、逃げる気なかったみたいだからな。」
「正樹君って…気丈な子ですね。自分が誘拐されたことを気付かれないように、意識を塞いだなんて…」
「ん。しかし、ザリアベルが正樹君に怒ってたよ。…親を悲しませるつもりかってさ。」
「…そうですよね。確かに。」
圭一がそう微笑みながら言って、浅野の隣に座った。
「今日はザリアベルさん、来ないんですか？」
「ああ。今、海斗君が赤ちゃん連れて、正樹君の家に来てるんだそうだよ。ザリアベルも赤ちゃん見に行くってさ。」
「そうですか。ザリアベルさんって、本当に子どもが好きなんですね。」
「ん。顔に似合わずな。」
『やかましい。』
突然、向かいのソファーにザリアベルが現れて、浅野は飲んでいたコーヒーを吹き出した。
「ザリアベルさん！」

圭一が嬉しそうに声を上げた。浅野はむせるのに精いっぱいだ。圭一が笑って、浅野の背を撫でながらザリアベルに言った。

「紅茶飲みます？」

「ん。」

「今日は「レディグレイ」があるんですけど、いかがですか？」

「それはいい。「レディグレイ」ならストレートのままで頼む。濃いめにな。」

「わかりました！」

圭一はそう言うと、立ち上がってキッチンに向かった。

「ザ、ザリアベル…ごきげんよう…」

浅野がまだむせながら言った。

「ごきげんよう。」

ザリアベルが無表情のまま言った。

「海斗君とたっちゃんは元気でしたか？」

「ああ…途中でこっちが疲れて逃げてきた。」

「そんなに元気だったんだ…」

浅野はそう言うと、コーヒーを口に含んだ。

「あー…びっくりした。」

「ショーの構成は決まったのか？」

「ええ！ほとんど決まりました。台本も明日にはできあがりますよ。」

「…台本読まなきゃいけない程、セリフがあるのか？」

ザリアベルが不安そうに言った。浅野は自分の顔の前で手を振りながら言った。

「ああいえ。ザリアベルは二言三言くらいです。後は、逃げ回ってもらえれば。」

「そうか…」

ザリアベルがほっとしたように言った。すると浅野が突然思い出したように言った。

「あ、それから、今週中に副社長に挨拶に行っていただきたいんですよ。ザリアベルは、悪魔役のフリー役者ということになっているので…」

「わかった。」

ザリアベルがそう答えると、フルーティーな香りが漂ってきた。圭一が「レディグレイ」の入ったカップを盆に乗せて、ザリアベルの横に座った。

「はい、どうぞ。ザリアベルさん。」

「ありがとう。…さすが、いい香りだな。」

「スコーンも今温めているんです。もうちょっと待って下さいね。」

「そうか。」

ザリアベルが嬉しそうにした。浅野が圭一に慌てて言った。

「えー！？圭一君、僕のはー？」

「ちゃんとありますよ。」

「やった！」

浅野が両手を上げて喜んだ。圭一が笑った。ザリアベルも苦笑している。

…だが、この穏やかな時間は、さほど長くは続かなかった…。

（終）

神隠し（終）

「この世界は滅びるべきだ…」

文男はパソコンに向かってそう呟きながら、キーボードを叩いた。

「やっと、その時が来た。私以外の人類が全て滅びる日が…しかし、安心しろ。私がこの地球を立て直してやるから。」

文男はそう打ち終わると、ブログの送信ボタンをクリックした。そして、その言葉がアップされたのを確認し、にやりと笑った。…しかし、何も起こる様子がない。文男は「あれ？」と呟いて自分の部屋を見渡した。

「おかしいな…ちゃんと悪魔と契約したのに…」

文男は立ち上がり、窓のカーテンを開いた。月が煌々と輝いていた。

「平和じゃーん！…って、何で？？」

文男がそう呟くと、月の中央から長い体をくねらせて飛んでくる何かを見つけた。文男はそれを見て、嬉しそうに声を上げた。

「来たあーーーーーー！」

その何かはドラゴンだった。しかしドラゴンは体をくねらせながら、まっすぐ文男に向かって来た。

「えっ！？ばかっ違う！俺以外の人類を滅ぼすんだってば！」

しかしドラゴンは窓を突き抜け、大きく口を開けて文男に襲いかかった。

……

「神隠し…か」

浅野はそう呟くと、新聞を閉じた。

「5人目だそうですね。」

その浅野の横で「清廉な歌声を持つ魂」と悪魔たちに恐れられている北条圭一（きたじょう）が、膝で丸くなっているキジ猫形の天使「キャトル」の体を撫でながら言った。

浅野がふと、キャトルと圭一を見て言った。

「…猫だからいいけどさー。キャトルが今、少女形だったら危ない親子だよねー。…娘の体を撫で回す父親…」

浅野のその言葉に、キャトルは片目だけを開いて前足を伸ばし、浅野の手をガリッと引っかいた。

「いってぇーーーーっ！」

浅野が新聞を落として、引っかかれた手を押さえた。

「キャトル」

圭一が笑いながら言った。

「気にしないでいいから。」

圭一がそう言うと、キャトルは目を閉じてフンと鼻をならした。キャトルは圭一の子どもとして生まれるはずだったのだが、それが叶わなかったので猫として生まれてきたのだった。

「お父さん！ちゃんと娘の教育して下さいっ！」

浅野はそう言いながら引っかかれた手をさすり、傷が消えたのを確かめた。

「あー…痛かった。人間ならひと月は傷が残るぞ…」

浅野はそうブツブツ言いながら、向かいのソファーに移動した。圭一が苦笑するように笑ったが、新聞を拾い上げながら真顔に戻って言った。

「ただ、神隠しに遭った人達というのは、皆、極端な思想の人ばかりだそうですよ…。例えば昨夜の人は、自分以外の人類は滅びる…とブログに書いた後で姿を消したそうですし、その前の人は、昨夜の人と同じような文章を残していたそうです。僕も何か気になって、それを画面メモに残してたんですが…」

圭一はそう言って携帯電話を開き、ある画面を表示すると浅野に見せた。浅野がそれを見ながら、呟くように読んだ。

「巨大なドラゴンがその長い体で空を覆い尽くし、ドラゴンが吐く

地獄の炎で、地球は焼き尽くされるだろう…」

圭一は、眉をしかめている浅野に言った。

「どう思います？ドラゴンは神の使いじゃないんですか？地球を焼き尽くしたりしますか。」

「解釈の違いだが、神の使いは「ドラゴン」とは言わない。「竜」…「神竜」と呼ばれるな。この文章の「ドラゴン」とは悪魔を差すんだ。だけど悪魔（あっち）にしたら、地球を焼き尽くしたって自分の得になるわけじゃないからなぁ。」

浅野のその言葉に、圭一は少し安心したように言った。

「じゃぁ、ドラゴンに地球を滅ぼされるなんてことはないんですね。」

「ないと思うよー。」

浅野は組んだ手を頭の後ろに回して伸びをしながら言った。

圭一はリビングの壁時計を見、キャトルを抱いたまま立ち上がって言った。

「あっ浅野さん！もうプロダクションに行きましょう！ザリアベルさんがそろそろ来られる時間です。」

「おっと、そうだったな。」

浅野もそう言いながら、ゆっくり立ち上がった。

……

「おじさん、どうしてそんな顔なの？」

悪魔の中でも、大悪魔（アークデビル）という高い地位にいるザリアベルだが、この人間界の子どもにすれば、ただの「おじさん」（本当はお兄さん）なのだ。
ザリアベルは気にする風もなく、その小さな子どもにしゃがんで言った。

「イベントだ。」
「…？イベント？」

小さな女児が首を傾げて言った。ザリアベルが説明しようとした時、母親らしい女性が血相を変えて駆け寄り、ザリアベルに何故か「すいません」と謝って、女児の手を取り走り去ってしまった。

「ママ、イベントってなーにー？」

女児の声が遠ざかって行く。
ザリアベルは苦笑しながら立ち上がった。

『…ザリアベルさん…人間形になれないんですか？クロイツさんだった頃のお姿とかに…』

圭一の言葉が、ザリアベルの頭の中に蘇った。

「なれるものならな…」

ザリアベルはそう呟いて、また苦笑した。

……

圭一の養父であり「相澤プロダクション」の副社長である「北条明良(きたじょうあきら)」は、少し困惑したような表情で、ザリアベルと握手を交わしていた。

「息子がお世話になってます。」

明良はそう言い「どうぞ」とザリアベルに座るように手を差し出した。ザリアベルは黙って座った。

ザリアベルの横には、天使「アルシェ」の人間形「浅野俊介」が、明良の隣には、圭一が座り、少しおどおどしたような様子を見せている。明良がザリアベルに尋ねた。

「ノイツ・クロイツさんとおっしゃるんですね。ドイツ…の方ですか?」

「その近くの小国です。」

「そうですか。日本語、お上手ですね。」

ザリアベルはこくりとうなずいただけで、何も言わない。明良が続けた。

「…今回のイリュージョンショーで「悪魔」役で出て下さるとか…。圭一から聞いて驚きましたが、普段から、そういう格好をされているのですか?」

「はい。素顔を見せてはならない仕事をしておりますので。」

「素顔を見せてはならない…というのは、プロレスラーか何か…?」

「…そのようなものです。」

浅野と圭一は、ザリアベルが明良に話を合わせてくれていることにほっとしていた。

明良は気づいていないが、本当の悪魔であるザリアベルに結構失礼

なことを言っているので、浅野達はザリアベルが途中で怒りださないかとはらはらしていた。
明良はザリアベルに微笑んで言った。
「何かと息子が無茶を言うかもしれませんが、どうぞよろしくお願いいたします。悪役で申し訳ないですが、ショーでクロイツさんが活躍されるのを楽しみにしています。」
ザリアベルが、その明良に面食らったような表情をした。そして「Ｄａｎｋｅ（ダンケ）…」（ありがとう）とうつむき加減に言った。
明良は微笑んで立ち上がった。そしてザリアベルに頭を下げた。
圭一と浅野が一緒に立ち上がり、明良に頭を下げた。ザリアベルも立ち上がって、丁寧に頭を下げている。その軍人らしい頭の下げ方に、浅野はくすっと笑った。
明良が部屋を出たところで、圭一に手招きした。
「はい！」
圭一が明良に駆け寄ると、明良が言った。
「後で打ち合わせの報告をしに来てくれ。それからクロイツさんに、食堂かバーでちゃんとおもてなしするんだぞ。」
「はい！わかりました！」
「ん。」
明良は満足そうにうなずき、ドアを出て行った。
「うはぁーーっ！！」

浅野が椅子に座りこんで、思わずそんな声を上げた。

「緊張したー！！」

その浅野の言葉に、ザリアベルは椅子に座りながら、

「お前がどうして緊張するんだ。」

と浅野に言った。

「いやぁ…なんとなく…。」

浅野がそう言いながら、額に浮かんだ汗を手で拭った。圭一が椅子に座りながら笑っている。

「僕も緊張しました。」

「お父上は…」

ザリアベルが、圭一に向いて言った。

「？はい？」

「…いろいろとご苦労された人だな。」

圭一が驚いた表情をした。浅野は微笑んでいる。

「…はい…。」

圭一がそう言うと、ザリアベルは何か黙り込んでしまった。

浅野と圭一は、不思議そうに顔を見合わせた。

……

ザリアベルは、肩身がせまそうな様子で食堂のテーブルについていた。食堂に入ってくるタレントや研究生達が不思議そうに見るからである。

隣には浅野がいるのだが、浅野は気にしない様子で、圭一が3人分の日替定食を頼んでいるのを見ている。

「あ！行く行く！」

浅野がいきなりそう言い、立ち上がった。圭一が手招きしたのだ。

ザリアベルは独りにされ、また気まずそうにうつむいた。

「ここいいですか？」

いきなりザリアベルの向かいの席に、スパゲティの皿の乗った盆を持った青年が立って言った。

ザリアベルは顔をあげ、ただ黙ってその青年を見つめた。

青年は微笑んだまま見つめ返している。ある意味いい度胸をしている。

すると圭一が盆を持って戻ってきて、その青年に話しかけた。

「秋本さん！今日いらしてたんですか！」

「ああ。久しぶり圭一君。ここいいのかな。」

「もちろん！はいザリアベルさん、どうぞ。」

圭一は、その青年の横に座り、ザリアベルの前に定食が乗った盆を置いた。

この食堂名物の「チキンソテーのトマトソースがけ」だった。

「ザリアベルさんのお好きな、バケットはないんですよ。普通のロールパンですいません。」

圭一の言葉に、ザリアベルは「構わない」と呟いた。浅野が2つの盆を圭一と自分の前に置いて、ザリアベルの隣に座った。

「ザリアベルさんって、おっしゃるんだ。僕はバイオリニストの秋本です。よろしく。」

向かいに座った青年がザリアベルにそう言い、手を差し出した。ザリアベルは一瞬こぶしを差し出したが、すぐに手を開き秋本の手を握った。

秋本はその一瞬を見逃していなかったが、何も言わなかった。圭一が言った。

「本名はノイツ・クロイツさんっておっしゃるんです。浅野さんのショーに悪魔役で出ていただくんですけど、その悪魔の名前が「ザリアベル」なんです。」

「へぇ…。クロイツさんは普段のお仕事は？」

「……」

ザリアベルは黙っている。圭一と浅野も困ってすぐには何も言えなかった。

「悪魔だ。」

「！？」

浅野と圭一が驚いた表情をしたが、秋本は「やっぱり」と言って、納得したようにうなずいた。

これにはザリアベルも驚いた。圭一も驚いている。浅野だけがにこ

にこと秋本を見ている。
浅野は羽が生えている姿を秋本に見られた事がある。秋本はその時、ファンタジー小説が好きで、そういう世界があることを信じていると浅野に言ったのである。

「本物だとは思ってたんですけどね。お会いできて光栄です。」

秋本はそう言って、また手を差し出した。ザリアベルは面食らったような顔をして、その手を握った。

……

「地獄ってないんだ…」

秋本が、食後のコーヒーを飲みながら感心したように言った。ザリアベルは、紅茶をひと口飲んでから言った。

「あるにはあるが、悪いことをすれば堕ちるというものではない。俺たちが引きずって行くことはあってもな。」
「向こうでは仏教とかキリスト教とか…世界が分かれているんですか？」
「そんなもんない。仏教もキリスト教も、元は人間だった者が信仰されているだけだ。神は別にある。」
「なるほどー…」

圭一と浅野は、秋本とザリアベルが話しているのを、黙って聞いていた。
秋本は意外に熱心だった。ザリアベルの話も真面目に捉えている。
秋本は、ふと顔をしかめて腕を組み、椅子にもたれた。

「そもそも、クロイツさんはどうして悪魔になっちゃったんですか？」

圭一と浅野はその秋本の質問にぎくりとした。
圭一が慌てて、秋本に言った。

「秋本さん！…今日、お仕事じゃなかったんですか？」
「ん？別に？遊びに来ただけ。」
「…そう…ですか…」

圭一は、困ったようにうつむいた。だがザリアベルは気にしないように、紅茶をひと口飲んでから言った。

「私は軍人だったものでね。多くの罪のない人々を殺した。…だからだ。」
「でも、それって…」

秋本がまた身を乗り出して言った。

「国の命令でやむなくしたわけでしょう？クロイツさんの罪ではないとは思いますが…。」
「国に逆らって軍人にならなかった者もいる。…そうしようと思えばできたのに俺はしなかった。」
「うーーん…。でもそれで悪魔にされるってのは、可哀想というか気の毒というか…。」

その秋本の言葉に、圭一も浅野も同じ思いを持っていた。ザリアベルはふと目を伏せて言った。

「昔、俺はおかしなところがあってな…。人を殺すことに違和感を

感じなかった…。」

秋本達はそんなザリアベルの顔を見て、黙り込んだ。

「ごちそうさま。」

ザリアベルがそう言い、立ち上がった。
圭一と浅野も、思わず一緒に立ち上がった。
秋本がにこにことしながら立ち上がり、ザリアベルに手を差し出した。

「今日は、貴重なお話を聞けて楽しかったですよ。またいろいろと教えて下さい。」

ザリアベルはうなずいて、こぶしを差し出した。圭一と浅野は驚いた表情でザリアベルを見た。
秋本はにこりと微笑んで、その拳に自分の拳を軽くぶつけた。…秋本はそれがザリアベル式の挨拶だという事を理解したのだ。

「Ｓｅｈｅｎ（ゼーエン）ｗｉｒ（ヴィア）ｕｎｓ（ウンス）ｗｉｅｄｅｒ（ヴィーダー）.」（またな）

そのザリアベルの言葉に秋本は微笑んで「ええ…またお会いしましょう。」と答えた。
圭一と浅野が驚いて、秋本を見た。

「秋本さん、ドイツ語わかるんだ！」
「いや、わかんないよ。」
「えっ！？でも今…」
「何か気持ちが通じたんだ。クロイツさんがそうしてくれたのかもね。」

秋本はそう笑いながら言ってザリアベルを見た。ザリアベルは、ただ秋本を見返していた。

……

翌日ー

明良は、カーナビから圭一の歌を流しながら、車を運転していた。
雨が強い。
ワイパーを全速にしていても、次から次へと大粒の雨がフロントガラスにぶつかり、視界が悪かった。

「台風はまだのはずだが…」

明良はそう呟きながら、先の信号が赤になったのを見て、ゆっくりとブレーキを踏んだ。
明良は圭一のアルバムが終わったことを感じて、カーナビを操作しようと手を伸ばした。その時、ふとバックミラーを見て、目を見開いた。
異様に白い顔の男が後部座席にいる。スーツ姿ではあるが、人間でないような大きな目と口に明良は振り返った。

「そなたは死なねばならん。」

白い顔の男が明良に言った。明良は「え？」と言った。

「『清廉な歌声を持つ魂』を目覚めさせた罪で、そなたは死なねばならん。」
「！？…清廉な歌声…？…圭一の事ですか？」

「そうだ。」

男がそう言って身を乗り出した。明良が首を締めつけられたような息苦しさを感じた時、カーナビから突然、圭一の歌声が流れた。

「！！！！」

白い顔の男は動きを止め、異様な大きな目を見開かせた。そして「くそ…」と言って、そのまま姿を消した。明良は急に呼吸が楽になり、首に手を当てて息を弾ませた。

…信号は青になっていた。後ろの車が、いらいらしたようにクラクションを鳴らした…。

……

「父さん、お帰りなさい！」

明良が副社長室に入ると、ソファーに座っていた圭一がそう言って立ち上がった。

「あ、ああ。ただいま。」

明良は何かほっとした顔をして言った。だが、圭一がふと眉をしかめて明良に言った。

「父さん？…顔色が悪いですよ…。どうしたんですか？」

「そうか？…大丈夫だよ。あまりに雨が強くてね、運転に疲れてしまって…」

「ああ、確かに…。台風みたいな雨でしたからね。」

圭一が窓から外を見ながら言った。今は大分小ぶりになっている。

「コーヒー飲みますか？」

「ああ、頼むよ。」

「はい！」

圭一はそう言い、部屋の奥へと入って行った。

明良はソファーに座り、ネクタイを緩めながら「清廉な歌声を持つ魂…」と呟いた。

「？何ですか？父さん。」

「え？…ああ、いや…なんでもない。」

明良はネクタイを外して言った。そして大きくため息をつくと、天井を見上げた。

「！？父さんっ！？」

コーヒーカップを盆に乗せてきた圭一が、叫ぶように言った。明良は圭一に向いて言った。

「ん？どうした？圭一…」

「…首にあざが…」

「！？」

明良は、はっとして自分の首に手を当てた。

「かなり赤くなっています！お医者様を呼ばなきゃ！」

「圭一、もう大丈夫なんだ…そんな大げさにしなくてもいい。」

「よくないですよ！まるで紐で縛られたような痕じゃないですか！」

「！？」

明良は立ち上がり、掛けてある鏡で自分の首を映してみた。

「！！」

圭一の言うとおりだった。太い紐でしばられたような痕が自分の首に赤黒く残っている。

「父さん！何があったんです！？…言って下さい！」

明良はとまどったように目を泳がせると、ソファーに座りこんだ。

「父さん！」

圭一が明良の横に座った。明良は目を泳がせたまま言った。

「…信じてもらえるかどうか…」

「信じます！信じますから、言って下さい！」

「…圭一。」

明良が圭一の目を見て言った。圭一は目を見開いたまま、明良を見ている。

「…お前…命を狙われているんじゃないか？」

「…え？…」

圭一がぎくりとした表情をした。明良が圭一の腕を取って言った。

「…「清廉な歌声を持つ魂」…お前はそう呼ばれているのか？」

「！？…父さん…まさか…悪魔に会ったのですか！？」
「悪魔だと？」
明良はそう言うと「…そうか…悪魔と言えば…」と呟き、圭一から目を反らした。
あの異様な白い顔はそうかもしれないと思ったのだ。明良は圭一に向いて言った。
「お前…悪魔に命を狙われているのか？」
「！！…それは…」
今度は圭一が目を反らした。明良がその圭一の肩を取り、自分に向けて言った。。
「その悪魔は…「清廉な歌声を持つ魂」を目覚めさせた罪で、私を殺すと言っていた。」
「！？…」
「私が死ぬことで、お前が助かるのならば構わないが、そうはいかないだろう。」
「…父さん…」
「お前を守る方法は何かないのか？…私はお前の歌で助かった。…だが、お前自身はどうやって…」
明良がそう言ったとたん、急に顔をしかめ、頭を押さえた。
「！？父さんっ！？」
圭一は驚いて、倒れ込んできた明良の体を支えた。
「父さんっ！？父さんっ！？」

『圭一君、すまない。』

そのザリアベルの声と共に、２つの影がソファーの傍に現れた。
圭一は明良の体を抱きしめたまま、その影を見た。影はやがて悪魔と天使の姿になった。

「！？…ザリアベルさん…アルシェ…！」
「副社長の記憶を今消したんだ。」

アルシェが言った。圭一が目を見開いた。

「俺たちが気づかないうちに…お父上を危険な目に遭わせてしまったようだな…」

ザリアベルが沈鬱な表情で言った。

「どうします？ザリアベル…。まさか、明良副社長にまで危険が及ぶなんて…」

アルシェの言葉に、ザリアベルは唇を噛んだまま黙っている。…が、しばらくして、アルシェを見て言った。

「ちょっと魔界に降りて調べてみる。…時間がかかるかもしれないから、それまでお前とリュミエルで副社長と圭一君を守れ。」
「…はい。」

アルシェがうなずいた。ザリアベルは2人に背を向け、姿を消した。

……

「つまんない…」

少女形の天使「キャトル」は、浅野のマンションのリビングでふてくされながら、ソファーに座っていた。

「私だけ、お留守番だなんて…。私もパパのところ行きたいなー…」

キャトルはザリアベルが戻ってくるのを待つように、浅野に言われていた。

圭一と父親の明良は、アルシェとリュミエルが守っている。

その時、キャトルは何かに気付いて、ソファーから立ちあがった。

「ザリアベル？」

だが、キャトルは出現した男を見て、顔を強張らせた。

白い顔に、異様な大きな目と大きな口を持った悪魔だった。

「ザリアベルは戻ってこない。」

「…どういうこと？」

キャトルは顔を強張らせたまま言った。悪魔が言った。

「魔界に結界を張ったからな。ザリアベルでも壊せない結界を…」

「…副社長を襲ったのは…そのためなの？」

「その通りだ。…本当は、ついでに殺してしまいたかったがな…。」

キャトルは怒りに唇を噛んだ。悪魔はにやりとして言った。

「後は、アルシェとリュミエルを「清廉な歌声を持つ魂」から離れさせること…。それはお前を…」

キャトルは予感して目を見開き、手を振った。ムチが出現した。

……

プロダクションの副社長室で、圭一と明良はイリュージョンショーの打ち合わせをしていた。

その2人の横には、天使「アルシェ」と「リュミエル」が座り、2人を守っている。

圭一には、その2人の姿が見えるが、明良には見えていない。

「…うん。今回は笑いが絶えないような、楽しいショーになりそうだな。」

明良が見ていた構成表をテーブルに置いて言った。圭一がほっとしたように言った。

「ええ。特に、子ども達が楽しめるようなショーにしたいと思っています。」

「ん。それはいい。」

圭一は微笑んだが、その顔が突然ひきつった。

アルシェとリュミエルが、表情を固くして立ち上がったのが見えたのである。

「?…どうした?圭一?」

明良が圭一のその様子を見て言った。

その時、白い顔の悪魔が明良の背に現れた。手には傷だらけになった子猫のキャトルを掴んでいる。

「キャトル！」

圭一が立ち上がって思わず叫んだ。明良が振り返った。

「！？キャトル！」

明良の目にも白い顔の悪魔とキャトルが見えた。

「副社長！」

アルシェがとっさに明良の腕を掴み、部屋の外へ瞬間移動しようとした。だが2人は見えない壁に阻まれて体を弾かれ、その場に倒れた。

「父さんっ！」

圭一が倒れた明良の傍に駆け寄った。

「…あれは…あの時の悪魔か…」

明良が圭一に体を起こされながら言った。圭一が目を見開いた。あの時アルシェが記憶を消したはずなのに、明良はちゃんと覚えている。

副社長室が突然、白く輝き始めた。

「！？」

圭一と明良が辺りを見渡すと、霧に包まれたような場所に変わった。
「魔界じゃないな…。どこか異界に連れ込まれたか！」
アルシェはそう呟くと、はっと上空を見上げた。
ドラゴンが体をくねらせながら、飛んでいる。
圭一と明良も、空を見上げて目を見開いた。アルシェは弓矢を出現させ、ドラゴンに矢を向けた。
リュミエルが圭一達の前に立ち塞がった。
「私から離れないで！」
リュミエルの言葉に圭一がうなずいて、リュミエルを見て驚いている明良の腕を取った。
明良が圭一に言った。
「…お前は…やっぱり命を狙われていたのだな。」
「…大丈夫です。…僕の天使達が守ってくれます。」
圭一の言葉に、明良がうなずいた。
「清廉な歌声を持つ魂もこれまでだ。」
白い顔の悪魔がキャトルをリュミエルに投げて言った。
リュミエルはキャトルを抱きとめ、悪魔を睨みつけた。
「キャトルを…よくも…」
「…ドラゴンを置いていく。…早く清廉な魂を食べたいんだそうだよ。…せいぜいがんばるんだな。」

白い顔の悪魔はそう言うと、姿を消した。
ドラゴンは上空を飛びまわっている。圭一を襲う機会をうかがっているようにも見える。
アルシェが、ドラゴンに向けて何度も矢を撃っていた。
だが、その矢はドラゴンの堅いうろこに弾かれて落ちるだけである。
「…体の中へ撃つしかないか…」
アルシェが呟くように言った。リュミエルは圭一にキャトルを預けて、ドラゴンを見上げた。
「キャトル…」
圭一が抱いたキャトルの体を、明良が心配そうに撫でた。圭一は「僕のせいで…」と涙ぐみながら呟いた。
アルシェは飛び立つと、自分に向いて開いたドラゴンの口の中へ、光の矢を放った。
ドラゴンが苦しみ始め、体をくねらせた。うまくささったようだ。
アルシェは2投目を構えた。だが、暴れ出したドラゴンの口の中に矢を定める事ができず、一旦矢を下ろした。
「くそ…あれだけでは、こいつを消滅できないぞ…」
アルシェがそう呟いた時、リュミエルが意を決したように飛び立った。
「!?リュミエル!?」

アルシェはドラゴンの周りを何かを探すようにして飛ぶリュミエルを見た。
圭一の腕を守るように掴んでいる明良も、リュミエルを見ている。
圭一が何かに気付いたように、はっとして声を上げた。

「リュミエルやめてっ！」

同時にリュミエルは、突然ドラゴンの口の中へ飛び込んだ。

「！リュミエル！」

アルシェが叫び、矢を構えた。
ドラゴンは咆哮しながら体をくねらせ、苦しんでいる。

（くそっ…今、矢を撃つわけには…）

今、矢をドラゴンの口の中へ撃つと、リュミエルも一緒に消滅させてしまうかもしれない。アルシェは「…よし…俺も…」と呟いて弓と矢を消すと、苦しむドラゴンの口の中へ飛び込んで行った。

「アルシェ！…やめてーっ！」

圭一の叫ぶ声が響いた。明良は振り払おうとしている圭一の体を必死に抑えた。
その時、ドラゴンが輝いた。
そして体にひびが入り、間から光が漏れた。ドラゴンは断末魔のような叫びを放つと光と共に、体を爆発させた。
同時にアルシェとリュミエルの体が現れ、地面に落ちた。

「アルシェ！リュミエル！！」

圭一が明良を振り払い、倒れたアルシェとリュミエルに駆け寄った。
その時、残っていたドラゴンの首が圭一に向いた。

「圭一！」

明良は思わず、ドラゴンに背を向けて圭一の体を抱きしめた。その背をドラゴンの口から放たれた光の刃が食い込んだ。

「！！」
「父さんっ！！」

圭一はキャトルを抱きしめたまま、崩れ落ちる明良の体を必死に抱きとめた。
ドラゴンの首はまた口を開いた。圭一を狙っている。
圭一は、キャトルをそっと明良の傍に降ろし、ドラゴンの首に向いて立ち上がった。
そして両手を広げて構え、歌い始めた。

「Ａｍａｚｉｎｇ　ｇｒａｃｅ…　Ｈｏｗ　ｓｗｅｅｔ　ｔｈｅ　ｓｏｕｎｄ…」

圭一の「アメイジンググレイス」を歌う声が霧の中に響き渡った。
それを聞いたドラゴンは口を開けたまま、動きを止めた。だが必死に首を動かそうとしながら咆哮した。
圭一は涙声になりそうになるのをこらえながら、必死に声を張り上げて歌っている。

その時、突然ザリアベルが圭一の前に姿を現した。そして、苦しみながらドラゴンの首が放った光の刃を片手で弾いた。

「ザリアベルさん！」

圭一が歌うのをやめ、涙を指で拭いながらザリアベルの背に言った。

「…遅くなってすまない…。すぐに終わらせる。」

ザリアベルは、顔だけを圭一に向けてそう言うと、燃えるような紅い目をドラゴンに向けた。　ザリアベルとドラゴンはしばらく睨みあうように対峙した。

『あの結界を破ってきたのか…この裏切り者め…』

ドラゴンの声が響いた。ザリアベルは黙っている。

『ザリアベル…いつまでも天使と組むような事をしていたら、いずれお前は大悪魔（アークデビル）の地位を失うことになるぞ。…そろそろ悪魔らしくなったらどうだ？』

「…地位など…俺から頼んだ覚えはないっ！！」

ザリアベルはそう叫ぶと、広げた両てのひらを拳に変えた。すると稲妻がザリアベルの体から放たれ、ザリアベルの体を包んだ。ドラゴンが光の刃をザリアベルに放ったが、その稲妻にはじかれた。ザリアベルは両手をドラゴンに向けた。それと同時に稲妻が、ドラゴンの首に絡まった。

ドラゴンの首は稲妻とともに、のたうちまわるように空を飛びまわった。

ザリアベルは右手を横に振った。すると黄金の剣がその手に出現した。そして、ザリアベルがかがんだと同時に翼が出現した。

圭一は、そのザリアベルの黒々とした翼を初めて見て、目を見開いている。
ザリアベルは飛び立つと、暴れるドラゴンに向かい黄金の剣を振り上げた。そして静かに狙いを定め、ドラゴンの脳天に突き刺した。
「Ａｕｓｓｔｅｒｂｅｎ（アオスシュテルベン）（消滅）！！」
そのザリアベルの叫びとともに、ドラゴンの首は音もなく光のチリとなって砕けた。
……
「父さん…父さん…」
圭一が泣きながら、息をしていない明良の体を揺すっている。
ザリアベルは、その明良の傍にしゃがみ「Ｖａｔｅｒ（ファーター）」と呟いた。
そして唇を噛んで体を震わせ、すっと立ち上がった途端、姿を消した。
「ザリアベルさん！？…父さんを…アルシェ達を助けてっ！」
圭一の声が虚しく響いたように感じた時、鋭い光が辺りを包んだ。
「！！！」
あまりの眩しさに圭一は目を閉じていたが、やがてゆっくりと開いた。
すると圭一の目の前に木の杖で肩を叩いている、大きな羽を背負った白髪の青年がいた。

「あー…びっくりした。」

大きな羽を持った白髪の青年はそう言いながら、今度は反対側の肩を杖で叩いた。

「お父上はもう大丈夫だから。ほら。」

「！？」

その青年の言葉に、圭一は倒れている明良を見た。

明良は気を失ったままではあるが、背の傷は全くなくなっていた。

圭一は明良の口元に手をかざした。息をしている。

「！…父さん…！…父さん…良かった…」

圭一は明良の背に伏せて泣きながら言った。その時、圭一の腕にいたキャトルがくいっと顔を上げた。

「キャトルっ！」

圭一は、地面に降り立ったキャトルを抱き上げた。

「…良かった…ごめんよ…独りにして…」

キャトルは圭一の腕の中で「にゃあ」と嬉しそうに鳴いた。

「キャトルちゃーん！」

青年がそう言いながら手を差し出すと、キャトルは圭一の腕から青年の手に飛び移った。そして青年の腕を伝い、肩に乗った。

「キャトルちゃん、よく頑張ったねー！」

青年が、頬ずりをするキャトルに言った。キャトルが嬉しそうに「にゃあ」と鳴いた。

青年は、まだ倒れて目を覚まさないアルシェとリュミエルに振り返ると、2人の体を交互に杖で突いた。

「こりゃっ！アルシェ！リュミエル！起きんかっ！！」

アルシェとリュミエルは、突かれてやっと目を覚まし、はっと青年を見上げた。

「大天使様（アークエンジェル）！」

アルシェとリュミエルは慌てて飛び起き、その場に正座をしてひれ伏した。

「こりゃこりゃ。わしは黄門様か。…悪い気はしないがの。」

青年はそう言って、杖をトンと床に突いた。

「まーたザリアベルが目の前に現れたから、びっくりしてさ。君たちは、どれだけあの人に迷惑をかけてるんだ？」

「申し訳ありません！！」

「こんなことじゃお前たちをなかなか昇格させてやれんぞ。昇格できなきゃ、力も増やせないということだからの。もうちっとがんばりなさいよ！」

「はい！」

アルシェとリュミエルは、またひれ伏した。

その時、ザリアベルが姿を現した。大天使はザリアベルに振り返って言った。

「おおザリアベル。圭一君のお父上はもう大丈夫じゃ。うちの部下が無能ですまんの。」

「いえ。…私も力が足りず、圭一君のＶａｔｅｒ（ファータ）をこんな目に…」

ザリアベルが目を伏せながら言った。

「あの…」

アルシェが、顔を上げて言った。

「ファータ…って、どういう意味ですか？」

「ドイツ語で「お父上」という意味じゃ、ばかたれ！」

ザリアベルではなく大天使がそう叱りつけた。ザリアベルが苦笑している。

（うちの大天使様って、ザリアベルより口悪い～）

アルシェはそう思いながら、またひれ伏した。大天使は杖をトンと突いて言った。

「お前も、先進国の言葉くらいは話せるようになれ。少なくとも、世界中を周っている「イリュージョニスト」だろうがっ！」

「はい！」

「そうだ、ザリアベル…。」

大天使は思い出したように、ザリアベルに向いて言った。

「あなたもイリュージョンショーに出るんだっての。」
「え？…いや…それはやめようかと思っているんですが…」
ザリアベルがそう俯き加減に言った。大天使もだが、圭一とアルシェも驚いて顔を上げた。
圭一が「ザリアベルさん！…どうして…」と呟くように言った。
ザリアベルは圭一に向いて答えた。
「俺がショーにでたら、Ｖａｔｅｒ（ファータ）のように、観客に迷惑をかけるかもしれないからな。」
「！…ザリアベルさん…」
圭一はうなだれた。アルシェもため息をつきながら俯いた。リュミエルは神妙な表情で一点を見つめたまま動かない。
「確かにそうだの。」
大天使が、杖で肩を叩きながら言った。
「じゃぁ、わしが結界を張ってやろう。」
「！？」
ザリアベルが目を見開いて、大天使を見た。圭一達も驚いた目で、ニコニコとしている大天使を見ている。
「大天使様！…大天使様が下界のためにそんなことして、智天使（ケルビム）様たちから怒られませんか？」
「怒らないんじゃないのー？皆、お前のショーを楽しみにしてるって言ってたし。」

「えっ！？」
「案外、天使達ってのは地位が高かろうが低かろうが、娯楽好きなのよ。…今までのお前のショーだって、どれだけ駄目出しされてるか。…今まで言わなかったけどね。」
アルシェは顔を赤くして、うつむいた。ザリアベルがまた苦笑した。
「それから、圭一君。」
大天使が杖を床について言った。
「はい！」
圭一は立ち上がった。
「君もがんばって歌の精進に努めなさい。君の歌は、今のところ悪魔達の動きを封じ込めることしかできないが、これからもっと鍛錬すれば、命を癒せる力を持つこともできるようになる。」
「！！」
圭一は目を見張った。
「本当ですか？」
「ああ、本当じゃ。鍛錬あるのみじゃ。がんばりなさい。」
「はい！」
圭一はそう答えて、頭を下げた。
「じゃ、わしはそろそろ帰ろうかの。」

大天使はそう言い、頭を下げるザリアベルに手を上げた。
キャトルが、大天使の肩から圭一の差し出した手に飛び乗った。
「じゃ、キャトルちゃんもバイバイねー！」
大天使がそう言うと、キャトルが「にゃあ」と鳴いた。
大天使は背を向けて姿を消した。
それと同時に、霧のかかっていた世界が副社長室に戻った。
……
明良はソファーで目を覚ました。
「父さん！」
息子の顔がぼんやりと見え、やがてはっきりとした。
「圭一！」
明良は飛び起き、圭一の腕を取った。
「…無事か？…ドラゴンは！？」
圭一は驚いて目を見開いた。アルシェが記憶を消したはずなのに、
明良は覚えている。
明良は辺りを見渡して言った。
「キャトルは？…それから…天使達はどうなった！？」
「父さん！…大丈夫ですか？」

圭一が涙ぐみながら言った。

「何もありませんよ。キャトルもほら…」

圭一がそう言うと、キャトルが「にゃあ！」と元気に鳴いて、明良の膝に飛び乗った。

「キャトル…！」

明良はキャトルを抱きしめた。

「良かった…キャトル。」

明良はそう言ってから、キャトルを下ろした。そして「…何もない…か…。」と呟いた。

するとキャトルが「ぐるる…」と怒ったような唸り声を上げた。

「あっ！！」

圭一が気づいて言った。

「キャトル、ごめんごめん！ごはんまだだったね！」

「！…そうか！…お腹が空いたのか。ごめんよ、キャトル。」

明良はそう謝りながら、キャトルの顎を撫でた。キャトルは気持ち良さそうに目を閉じ、喉を鳴らした。

圭一が慌てて部屋を出て行った。キャトルのえさは専務室にあるのだ。

「…何もない…というのは、いいことだな。」

明良はキャトルの顎を撫でながらそう呟いた。キャトルが同意するように「にゃあ」と鳴いた。

……

翌日ー

「ドラゴンが、神隠しの犯人だったとはなぁ…」

浅野が新聞を読みながら言った。
神隠しにあったとされた5人の男は、ドラゴンが消滅したと同時に元の場所へ戻されていたのだ。
だが5人とも記憶があやふやで、訳のわからない事を呟いている…と新聞は報じていた。
圭一が浅野の前にコーヒーカップを置いて言った。

「どうしてドラゴンは、その5人をさらったんでしょうね…」
「たぶん、邪悪な力を強くしたかったんだろうな。」
「なるほど…。人類を滅ぼすとか、極端な思想を持っていた人ばかりでしたからね。」
「そういうこと。」

浅野は新聞を畳んだ。
その時、ザリアベルがソファーに座った状態で姿を現した。手には台本を開いて持っている。

「ザリアベルさん！おはようございます！」

圭一が言ったが、ザリアベルは何かぶつぶつと呟いている。

「…恥ずかしい…」
「え？」
浅野が耳に手を当てて、ザリアベルに聞いた。
「恥ずかしい？」
「恥ずかしい…。なんだ？この、出だしのセリフは…」
ザリアベルが差し出した台本を、浅野は受け取りながら読んだ。
「「私の名はザリアベル…魔界の中でも恐れられている大悪魔だ。」
…これのどこが恥ずかしいんですか？」
「どうしてもこれを言わねばならないのか？」
「言わねばなりません！」
浅野が笑いながらそう言い、台本をザリアベルに返した。ザリアベルは受け取りながら、台本を見つめため息をついている。
圭一が苦笑するように笑いながら、紅茶を入れにキッチンへ入った。ザリアベルがため息交じりに言った。
「なんとか言わない方法はないのか？」
「えー…？」
浅野は腕を組んで考える風を見せた。
「言わない方法ですか…じゃぁ、圭一君に言わせますか？」
「圭一君に？」
「ええ。例えば、ザリアベルが出現した時に「わー悪魔のザリアベルだー逃げろー」みたいな。」

「…なんだ、そのコントみたいな芝居は。」
「だめですか…」
「真面目に考えろっ！」
「考えてますよっ！！」

その時、圭一が紅茶の入ったカップをザリアベルの前に置いた。

「はい。ザリアベルさん、どうぞ。」
「…ありがとう。」

ザリアベルは台本を閉じてテーブルに置くと、カップを手に取り、紅茶を一口飲んだ。

「…ああ、うまい。」

そのザリアベルの呟きに、向かいに座った圭一がほっとしたような表情をして言った。

「ザリアベルさんが悪魔だということを、まず観客にわからせなければならないですから…。」
「この顔を見たら、悪魔だとわかるだろう？」

ザリアベルの言葉に、浅野が思わず吹き出した。圭一は浅野を睨みつけながら「そんな…」と言った。

「少なくとも、名前は言わなきゃ。」
「…ザリアベルデース」

圭一が驚いて目を見開いた。
ザリアベルが浅野を睨みつけた。浅野は「すんません」と頭を掻き

ながら謝った。
ザリアベルが何かを言おうとして口を開いた時に浅野が横でそう言ったので、ザリアベルが言ったように聞こえたのだ。
圭一が腹を抱えて笑いだした。

「びっくりしたーっ！ザリアベルさんが言ったかと思ったー！」

圭一はそう言って笑っていたが、ふと突然笑いを止めて言った。

「あっそうだ！こうしましょうよ！」
「うん！そうしよう！圭一君！」
「まだ何も言ってませんっ！！」

ふざける浅野を、ザリアベルがまた睨みつけた。浅野はザリアベルに「すんません」と謝った。圭一が笑いながら言った。

「先にザリアベルさんの声を録音しちゃうんですよ。で、エコーをかけて流すんです。ザリアベルさんはステージでは口を閉じたままでも構いません。その方が悪魔らしくないですか？」
「ほうっ！なるほどっ！」

浅野が同意を示したが、ザリアベルは不服そうにうつむいている。

「…録音にしても、そのセリフは言わなきゃならないんだな。」
「どうか、それだけはお願いします。」

圭一がそう言って、両手を合わせてザリアベルに拝むと、ザリアベルは「…わかった」と答えた。

「…圭一君にそこまで言われるなら…」

「えー？俺が言ってもだめだったのにー？」
「お前では説得力がない。」
「しどい～！」

浅野は両手で顔を塞いで泣く振りをした。
圭一が笑った。ザリアベルも苦笑しながら浅野を見ている。

…イリュージョンショーまで、あと1ヶ月。
うまくいくのかどうか…ザリアベルでなくても不安である…。

（終）

<番外編>イリュージョンショー

暗かった野外ステージが、ライトアップされた。
ざわざわとしていた観客が静まり返った。
誰もいないステージにドライアイスが流れている。

『私の名はザリアベル』

そんな声が会場に響き渡った。観客は息をのんで静かに聞いている。

『魔界の中でも恐れられている「大悪魔」である。』

その声とともに、ステージ中央に黒い服を着た男が突然姿を現した。
その男の目は紅く、両頬に2本ずつ長短の傷がある。
観客がどよめいた。

『君達は北条圭一(きたじょう)を知っているか?』

ザリアベルは口を開いていないが、ぶきみな声は続いている。
観客の子ども達が「知ってるー!」と、口々に答えた。

『この世界では、美しい歌声を聴かせるアイドルとして有名だそうだが、我々悪魔には不機嫌極まりない歌声だ。』

「なんでー?」と誰かが言った。一部の観客が笑っている。ザリアベルの声は、それを無視して続く。

『…その不機嫌極まりない歌声を持つ北条圭一を…この私が抹殺する。』

その時、ライトオペラを歌うスーツ姿の圭一が、ステージ後方にある高台に出現した。
観客からどよめきと拍手が起こった。
圭一が突然、ザリアベルに向かって言った。

「ザリアベルさん！！ここにいたんですか！」

圭一はそう言いながら、高台の前にある階段を下りた。
観客から笑いが起こっている。

『圭一君』

ザリアベルは口を開かないまま、圭一に振り返った。

『来るな、圭一君。』
「えー？どうしてですかー？」
『私は君を抹殺…』
「またまたー…」

圭一はそう言って、顔の前で手をひらひらと振って言った。

「ザリアベルさんって、いっつもそう言いながら、僕を助けてくれるじゃないですかー。」

ザリアベルは黙っている。
…これは、ザリアベルが嫌われないようにするために、浅野が考えた演出である。子ども好きなザリアベルが、嫌われないようにして欲しいという圭一の希望でもあった。

『圭一君、頼むから逃げてくれ。…これでは私の威厳が…』

このザリアベルの声に、観客から笑いが起こった。

「わかりましたよ。じゃぁその威厳に免じて…」

圭一はそう言うと姿を消した。観客がどよめく。

その時、浅野が高台に姿を現した。

「ザリアベル！こんなところにいたんだなっ！」

観客から大きな拍手が起こった。浅野は階段を駆け下りながら、ザリアベルを指差して言った。

「今日こそ、お前を捕まえて見せるからな！」

『浅野俊介…いつもいつもしつこい奴だな。』

ザリアベルはそう言うと、姿を消した。

浅野が観客を見渡して言った。

「観客の皆さま！ザリアベルがあなたの傍に現れるかも知れません！その時、腕なり足なりつかまえて「ザリアベルはここ！」と叫んで下さい！捕まえに行きますので！」

観客がどよめき始めた。皆顔を見合わせたり、辺りを見渡している。

その時、観客席から悲鳴が上がった。

浅野がその悲鳴が上がった方を見て「つかまえてっ！」と言った。

すると、今度は別の場所から悲鳴が上がった。

ザリアベルが瞬間移動したようだ。

「だから、つかまえててっ！」

浅野がそう言うと「つかまえたぞっ！」という声がした。

「ＯＫ！」

浅野はステージから姿を消した。観客がどよめいた。

……

「あれ？ここじゃなかった？」

観客席に出現した浅野はそう言って、辺りを見渡した。

「消えた！」

子どもの１人が言った。

「え？つかまえたのに消えたの！？」

浅野がそう言うと、周りの観客達がそれぞれ、驚いたような顔をしてうなずいている。

「残念！」

浅野がそう言いながら消えた。

どよめきが起こった。

「どうなってるんだろうなぁ…。」

1人の若い男性がそう言って首を傾げている。

……

浅野がステージに出現した。拍手が起こる。

「くそーザリアベルめ！…こうなりゃ俺も本気入れて、天使に変身だっ！」

浅野がそう言うと、観客から笑いが起こった。

浅野は両手を広げた。それと同時に背中から大きな羽が出現した。観客の笑い声がどよめきに変わった。

浅野の髪が伸び銀髪に変わった。そして顔も鋭い目を持ったアルシェに変化した。

観客は浅野が天使「アルシェ」に変わっていく様を息をのんで見ている。

「私は天使の「アルシェ」だ！よろしくー！」

浅野ならぬ「アルシェ」はそう言って手を振った。観客はどよめきながらも拍手をしている。

「ザリアベル！俺は本気だぞ！出て来い！」

アルシェがそう言うと、今度はザリアベルが後方の高台に出現した。

『アルシェ…とうとう出てきたか。』

アルシェはその声に振り返った。
「ザリアベル！」
アルシェがそう言い、高台に瞬間移動するとザリアベルが消えた。
「くそっ！どこだっ！」
アルシェが観客席を見渡した。
……
ザリアベルが観客席に出現した。
周囲にいる観客が「わーっ！」と嬉しそうに声を上げる。
「イベントのおじちゃん！」
女児がそう言って、ザリアベルに手を差し出した。
ザリアベルはその手をそっと握り、女児の前に片膝をついた。隣にいる母親が驚いている。
ザリアベルが女児に言った。
「イベントの意味がわかったかい？」
「うん！こういうやつのこと。」
「そうだ。楽しいか？」
「うん！早く逃げて！」
「ああ。」
ザリアベルはそう微笑むと、姿を消した。
すると、すぐにアルシェが現れた。

また周囲から奇声が上がった。

「ザリアベルはっ！？」

女児が「知らないっ！」と笑いながら答えた。

「うそぉ…しゃべってたじゃなーい、ここでー」

「ううん。」

「そおかぁ？おかしいなぁ…」

アルシェがそう言いながら頭を掻いていると、別の場所で奇声が上がっている。

「あっちかっ！」

アルシェはそう言うと、姿を消した。また驚いたようなどよめきが起こった。

……

2人はその後も瞬間移動を繰り返したが、アルシェがザリアベルに追いつくことはなかった。

ザリアベルがとうとう姿を消し、アルシェは息を切らしながらステージ中央に姿を現した。

どよめきと共に、拍手が起こる。

「くっそーっ！ザリアベル！どこだっ！？まだこの会場の中にいるんだろう！？」

『お前に捕まるわけにはいかない。私には、まだやることがあるからな。』

ザリアベルの声だけが、会場に響いた。観客から何故か拍手が起こった。
アルシェが辺りを見渡しながら言った。
「ちくしょう！大阪公演では、絶対に捕まえるからな！！」
『え？大阪公演？』
ザリアベルの声が素に戻っている。観客から笑い声が起こった。これは演出ではない。
『大阪公演なんて聞いてないぞ、圭一君。』
『ザリアベルさん！マイク入ったままですって…』
『ここだけじゃないのか？』
『あ、あの、その話は後で…』
『東京公演だけって…』
ザリアベルの声がそこで、ぶつっと切れた。観客が大笑いしている。
アルシェも思わず苦笑しながら、遠くを指さしながら言った。
「ザリアベル！！大阪公演も出てもらうからなっ！！」
その言葉と同時に、アルシェはステージから姿を消した。そしてステージのライトが落ちた。
観客の笑い声と拍手は続いている…。
イリュージョンショーはこれからである。
（終）

＜おまけ－未公開シーン－＞

『私の名はザリアベル』

そんな声が会場に響き渡った。観客は息をのんで静かに聞いている。

『魔界の中でも恐れられている「大悪魔」である。』

その声とともに、ステージ中央に黒い服を着た男が突然姿を現した。
その男の目は紅く、両頬に2本ずつ長短の傷がある。
観客がどよめいた。

その時「デーモン小暮閣下！」というヤジが飛んだ。
観客が笑った。

『誰が「聖飢魔？（せいきまつ）」だ。』

ザリアベルがとっさに答えてしまった。その答えはマイクを伝って、会場に響いた。
観客席から一層大きな笑い声が響いた。

幕の後ろでは、圭一が腹を抱えて座りこんで笑っている。隣にいる明良も苦笑していた。

「ザ、ザリアベルさん…「聖飢魔？」知ってるんだ…」

圭一は必死に笑い声を抑えながら言った。

（終）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9990s/

悪魔の断罪－The Devil's Conviction－Part?

2011年10月8日05時08分発行